

ヨルダン、ウム・カイス遺跡のローマ帝国からビザンツ帝国への移行(その2)

—国士舘大学ヨルダン、ウム・カイス遺跡の発掘調査—

松本 健 国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員

The Transition from Roman Empire to Byzantine Empire in Umm Qais(2): Excavation at Umm Qais, Jordan, Kokushikan University

MATSUMOTO, Ken Co-researcher, the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

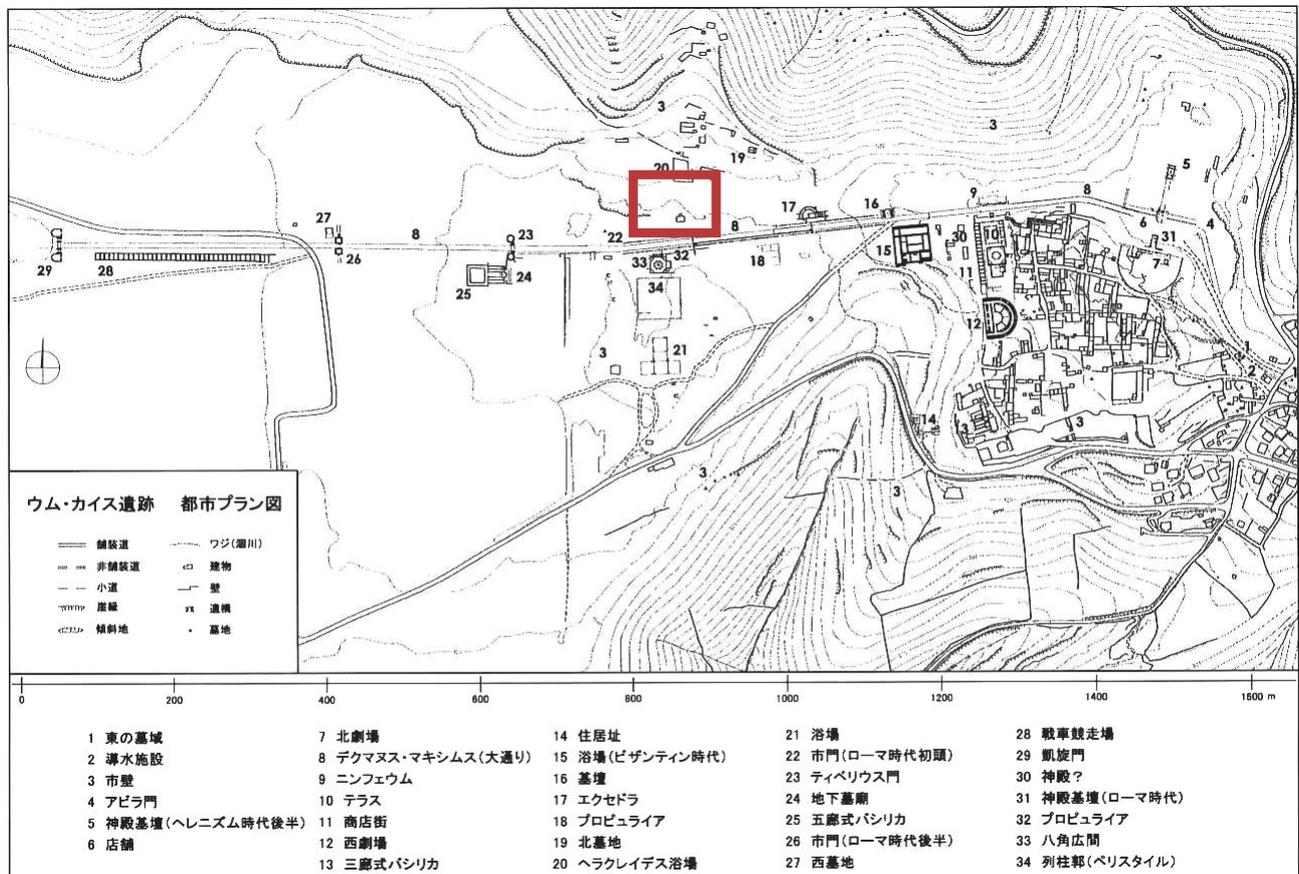
松本
健

1. 発掘調査の経緯

ヨルダン、ウム・カイス遺跡発掘調査はJICAによる1995～2000年の「イラク向け第三国文化遺産復興のための研修」、1995年から2015年までの文科省学術フロンティア事業「戦後イラクの社会基盤としての文化遺産学研究」、また朝日文化財団の支援を受け

「西円形劇場の修復」(2015～2017)などと平行して、国士舘大学の文化遺産研究プロジェクトが中心となって行ってきた。ただ2015年以降は中東の混乱で渡航が禁止され、さらに2020年からはコロナも世界中に広がって、現地での調査研究が困難となっている。

国士舘大学の調査区域はローマ時代に城壁で囲まれた町の西端、即ち「初期ローマ時代の城門」の内側、



(Claudia Bührig 2009. The 'Eastern City Area' of Gadara (Umm Qais): Preliminary Results on the Urban and Functional Structures between the Hellenistic and Byzantine Periods. SHAJ 10: Pl.1. に加筆・修正)

図1 ウム・カイス遺跡(□は国士舘大学発掘調査区域)



図2 ウム・カイス遺跡からガリラヤ湖を望む

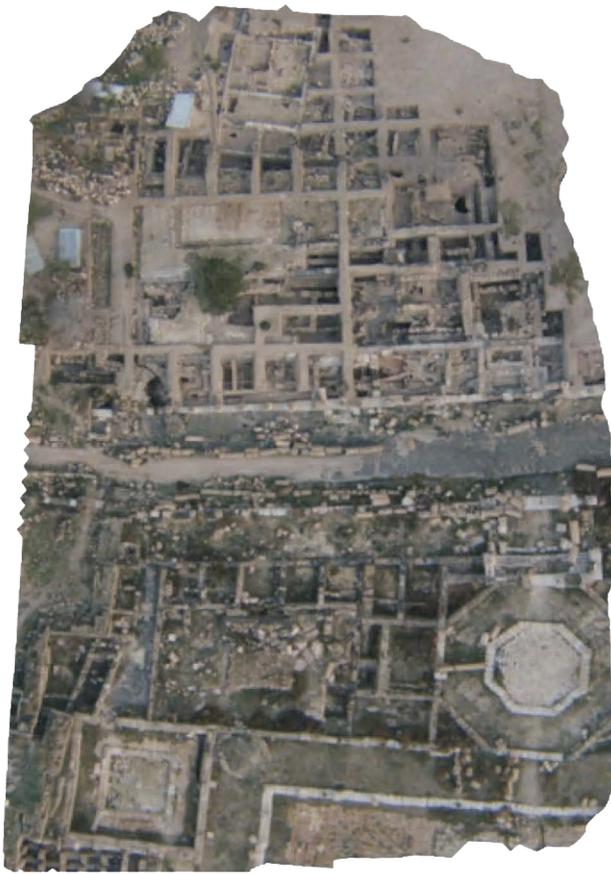


図3 中央の東西に大通り (Decumanus Maximus)、北側は
国士館大学発掘地、南側は八角堂とホール

そして列柱大通りデクマヌス・マキムス (Decumanus Maximus) の北側にある。

2. 発掘調査の成果

ヨルダン、ウム・カイスでの発掘調査の成果を文化層の下層から述べると、

- (1)ヘレニズム時代の神殿など公共施設は遺跡の東側に城壁に囲まれたアクロポリスにある。そこから

「初期ローマ市門」の内側で、その北側区域の離れた低地では、石灰岩の岩盤をくり貫いて、地下墓、また石切り場としてこの区域が利用されていた。また斜面で平坦部が少ないところから、岩盤を削って平坦にしたり、斜面に石積みの基礎壁を造って平地を拡張したりしている。

なおウム・カイス周辺のヘレニズム時代の遺跡は分布調査、試掘によってアイン・マゲーク遺跡 (ウム・カイスから北へ急斜面を 500 m ほど下る) が確認されている。ここは現在でも水が湧き出ているところで、その周りに小さな神殿などがあったと思われる。

- (2)ローマ時代になると、さらにヘレニズム時代の城壁が西側まで拡張され、列柱大通りデクマヌス・マキムス (Decumanus Maximus) そして「初期ローマ時代の市門」が建設された。その西端の、北側の発掘調査で 1 軒の邸宅 (Bil.4) が発掘された。ローマ時代の典型的な住居である。建物の中央には円柱で囲まれた中庭をもち、床は黒い玄武岩の石敷きである。そしてその周りに各部屋が配されている。この建物の北側には厚い壁が東西に造られていたが、その北側にも建物 (Bil.7) があったようである。後に建物 (Bil.3, 6) が建てられる際にそれらの基礎として利用したために、建物の平面が明瞭ではない。ただ方向は上部の建物とほぼ同じ方向である。これらの邸宅には多数の地下水槽が造られていた。また地下墓を改良して地下水槽や倉庫に利用していた。ローマ時代の終りには建築物は放棄され、ローマ時代の遺物、石材が多数その地下水槽などに投げ込まれていた。

- (3)初期ビザンツ時代になると、後期ローマ時代の邸宅の跡に、あるいは岩盤の上に、建物 (Bil.1) の基礎壁が築かれ、そして大量の土砂で埋められ、その上層には白い石灰の粉で覆っていた。そうして巨大な建物 (50×10 m) が Decumanus Maximus に沿って建設され、階段の付いた建物の中央に設けられた入り口も大通りに連結していた。この建物 (Bil.1) は土器、コインなどの遺物、C14 年代測定から、4 世紀前半の教会と思われる。ヨルダンでも最も古い教会と思われる。また北側に敷設されたのが、テラス状の施設 (Bil.2) である。ここから見える風景は、北西にガリラヤ湖、北にゴラン高原が見える風光明媚なところでもある (図 2)。さらに北側に接して、しかし 4 m ほど低い所に、

そしてやや遅れて建てられた建物(Bil.3) (22×9 m)がある。この東側には通路があり、これを挟んで東にテラス状の低い台(Bil.6) (7.5×10 m)が設けられ、4隅にはハート型の柱が立ち、その間は玄武岩の円柱が立ち並んでいた。教会は放棄され、所謂、バシリカ式教会へと移行していったようである。

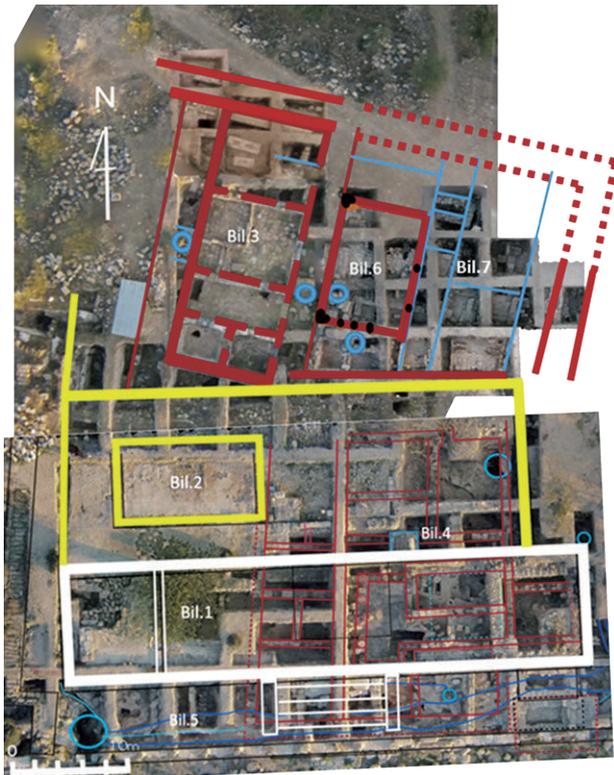


図4 国士館大学発掘地、西側には城壁、南側には大通り (Decumanus Maximus)

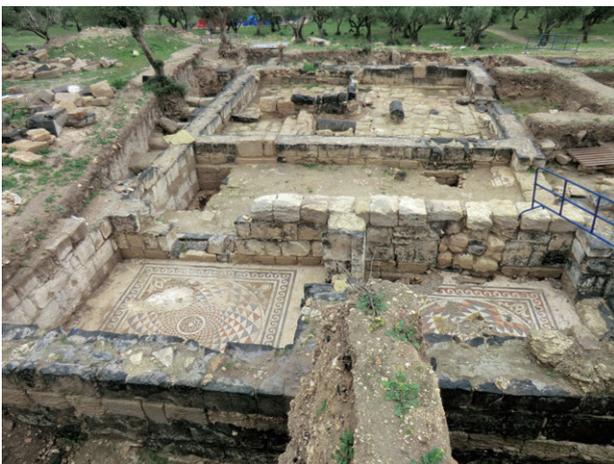


図5 建物(Bil.3)、床にはモザイクが張られている。



図6 建物(Bil.3)のモザイク床



図7 メダル、十字架と女性。聖ヘレナ？

Helena(325-326)



図8 ヘレナのコイン(江添誠氏解説)

(4)この区域は初期ビザンツ時代の後、ウマイヤ時代には放棄されていた建物 Bil.3 の出入口を塞いだり、モザイク床の十字のシンボルを隠すかのように石をおいたりして部屋が再利用されていた痕跡が観られる。また大通りには倒れた列柱のドラムを集め、ドラムを重ねて壁にして、部屋のような囲いをして、それらを並べて幾つもの部屋を造っている。これらには屋根がなく、おそらくテントのようなもので覆っていたと思われ、季節的に利用したのだろう。

3. 問題点

上記、断定的かつ簡潔に年代順の発掘調査の結果を記したが、問題点が少々残る。

(1)建物ローマンハウス(Bil.4)の年代は地下水槽の土器などから“Late Roman”としているが、この遺構が所謂大通り(Decumanus Maximus)の下層に位置することから、大通りとその門である“初期ローマ市門”(Early Roman Gate)が初期ローマ時代であるならば、年代的に矛盾が生じる。大通りと“初期ローマ市門”は“late Roman”か、それ以後のビザンツ時代となる。

ただ、この区域のローマ大通りは確かにビザンツ時代に造られ、あるいは改修されたようである。それはローマンハウスが放棄されて、その後、3mほど埋められ、その上にモザイク床が張られた建物(Bil.1)が建てられ、その入り口がこの大通りに沿って設計されているのである。この傾向は大通りを挟んで南側のホルムや八角堂などの広大な施設の方向が大通りに接するところで方向を修正し、大通りに合わせているのである。これらから少なくともこの区域の大通り、即ち八角堂の入口の中心線から西の初期ローマの市門までは石畳の方向も他とは異なっ

ており、ビザンツ時代の大通りとなっていると思われる。

(2)“初期ローマ市門”と“市壁”(City wall)について、テラス状の施設(Bil.2)の西端の壁とモザイク床の方向が修正されて、市壁と同じ方向に変えられている。これは建物(Bil.1, 2)の建設が市壁建設よりも前にすでに造られていたことを示しており、市壁建設の際に建物(Bil.2)の西端が接触するので、市壁と平行に、改築したと思われる。だとすると市壁は初期ローマ時代ではなく、ビザンツ時代の市壁であり、市門となる。

(3)グリッド R13 のトレンチ L2P3 から出土した十字架と女性像が象られたメダル(図7)がある。

この層位は上層の床上にあたるところで、時代は初期ビザンツと思われる。ただ表層には新旧の遺物も混在している可能性もあるが、他の土器片の出土状況からも初期ビザンツ時代の可能性が高い。その初期ビザンツ時代の十字架に最も関係が深い人物はヘレナであろう。

(4)ただ上記のローマンハウス(Bil.4)は後期ローマ時代であるとの推定を前提としているが、R13のcave、trenchを含む、さらなる詳細な層位的、形式的土器分析を進める必要がある。